



Dec.2002 No.20

函館からトラスト

「から」は函館からトラスト事務局から発行されるニュースレター。
公益信託函館色彩まちづくり基金を応援し、函館のカラーに関わる情報からまちづくりに関わる情報まで、
あちこちから集めて紹介します。皆様からの情報はもちろん、からくちのご意見もお待ちしております。

これからの10年——函館色彩まちづくり基金の新展開をめざして



函館色彩まちづくり基金は、来年の基金誕生10年目を迎え、新しい衣をまとったまちづくり基金として再出発をすることになりました。新しい衣のひとつは、基金の助成規模の拡大による新規分野を含めた支援制度の充実です。もうひとつが新運営委員による新たな体制で取り組む基金の運営です。

2月16日(土)、8月31日(土)の2回の運営委員会において、函館色彩まちづくり基金の今後10年の方向と新しい運営の仕組みを決める、重要な話し合いが行われました。基金運営の転換と新体制についてレポートします。

公益信託函館色彩まちづくり基金の発足・発展

1993年に公益信託函館色彩まちづくり基金が発足してから10年近くが経った。この間に基金を取り巻く状況は大きく変化している。金利の低下やペイオフ制度などにより、信託制度そのものがその存在意味を問われる状況も生じている。

公益信託とは、基金を銀行へ預け、一定の運用収益を確保し、その益金を目的にそった活動への助成支援に当てる仕組みだ。函館色彩まちづくり基金も2000万円の基金設定の当初計画では、運用収益を年6~7%と想定し、年間100万円程度の助成計画をたてていた。しかし1993年の基金設定時にはすでに低金利時代が到来し、その後さらに超低金利の時代となり、現時点ではわずか金利0.25%、実際基金は寝かせているだけの状態となっている。一方、信託管理の費用や官報への公告費、また運営費などの出費を計算すると、維持費だけでもかなりの金額が毎年必要になっていく。この間、少額(50~70万円)とはいえ、毎年市民のまちづくり活動へ助成を続けてこられたのは、函館市民や全国からの募金が多量であったというのが現実だ。

基金が助成してきた活動は総計で25件、総額470万円になる。そのなかには、◎毎年元町界隈の夏の恒例行事にもなった若者達のペンキ塗りボランティア隊の活動もその



ひとつに含まれるし、◎奥尻地震で被害を受けた海産商同業組合会館の復旧や、◎十字街の大火後の復興プランづくり、◎元町の住宅地での住民と地域の住環境を考えるワークショップの開催、◎松陰や湯川商店街の自主的なまちづくり活動、◎町家活用の路上アートミュージアムの試みなどが展開されている。ささやかな活動支援であったようにも思えるが、この10年の函館の話題となったまちづくりの主なものは含まれていて、その波及はけっして小さなものではないように思う。また基金をもり立てただけの輪も、函館市内から全国にひろがっている。

基金の運営についての議論の経過

基金の取り崩しによる積極的な助成活動をおこなうべきか、細々とでも出来るだけ長くその活動を続けるべきかは、運営委員会の重要な問題として設立当初より何度か議論さ



れてきた。

あまり知られていないことだが、函館色彩まちづくり基金の設立時の計画では、立ち上がりの数年間は、基金を取り崩して毎年200～300万円程度の助成を行い、目に見える成果をあげて寄付も集め、函館色彩まちづくり基金の社会的意義と助成活動を強くアピールし、印象づける。5年目からは巡航速度に落とし、助成額を毎年100万円程度で、安定した活動を継続していくというプランが想定されていた。しかしこの計画は主務官庁の道庁から認可がおりず、結局当初基金は取り崩さずに、収益や寄付により助成活動の運営を行いながら、運営委員会において、その運営方式を随時考えていくということになった。

運営委員会での議論を振り返ってみると、基金がスタートし、ある程度軌道に乗ってきた95年頃の運営委員会においては、「基金のアピールのためにも積極的に助成を拡大すべきだ」、「民間基金ならではのフットワークの軽さで柔軟に対応したい」、「活動あつての基金だから、今は十分に活動助成できるようにしたほうがいい」など、助成とその成果の手応えに、積極運営の声もあがった。しかし「先

の見通しもないのに、目先の活動にとらわれるのはどうか。きちんと予算を立てて寄付集めすべきだ」の声も強く、運営委員会としての一致した結論には至らなかった。

その後97～98年の議論では、積極運営への理解も深まっていったが、逆に取り崩さずしつと頑張ってきた経緯も評価して、「今は我慢の時。助成額も最小限におさえ、寄付やチャリティの開催などで資金を確保し、しばらくは取り崩しなしの現状のままやっていこう」という方向に議論が収束していった。

基金の運営の転換——これからの10年の積極運営へ

しかし、21世紀を迎え、基金の運営も10年近く経過する頃になり、運営方式の見直しを求める声が起こってきた。それは基金自体のこともあるが、もうひとつ函館のまちに対する危機感も背景になって生じてきた。函館の歴史的環境を活かしたまちづくりは、いま大きな転機にさしかかっている。1970、80年代の元町界隈の歴史的建造物の創意工夫に富んだ再利用からはじまった函館再生のまちづくり

■ 函館色彩まちづくり基金助成1994～2002

年度	回	函館色彩まちづくり基金助成	件数	金額 (万円)	函館からトラスト 事務局助成
1994	1	函館都電倶楽部 ハートクロス十字街 函館市民会館景観文化会 ペンキ塗り替え勝手連	4	70	ペンキこすりだし神戸 元町31ワークショップ
1995	2	ペンキ塗り替え勝手連 函館都電倶楽部 MGM(元町グランドワークモブメント) 海同会館の保存	4	70	
1996	3	ペンキ塗り替え勝手連 MGM(元町グランドワークモブメント) 松陰地区商店街	3	50	夜間景観研究会
1997	4	ペンキ塗りボランティア隊 松陰地区商店街 町並み色彩国際交流 柏木商友会	4	50	
1998	5	ペンキ塗りボランティア隊 西部地区群居ワークショップ	2	50	
1999	6	ペンキ塗りボランティア隊 湯川商店街景観組合 ペンキ塗りボランティア隊	2	50	
2001	8	ペンキ塗りボランティア隊 Art net函館・元町路上ミュージアム	2	50	
2002	9	ペンキ塗りボランティア隊 アート・ユニット・ロツパコ 北海道・東北史研究会 函館シンポジウムⅡ実行委員会	3	50	
			25		※合計件数 3

も、90年代以降は長い停滞の時代にある。地区の歴史的建物はこの10数年間の間に約1/3の建物が解体され、さらに重要な景観資源が危ぶまれる状況に立ち至りつつある。また地区の人口も最盛期からみれば1/4にまで減少し、高齢化率も30%近くになっている。今対策を講じなければ、函館の歴史的町並みの根本がくずれていく、そういう状況にいま立ち至っているのである。

一方基金の役割として、不景気や厳しい社会状況の中でこそ、地域で元気を出せるようなまちづくりや活動に、積極的に取り組むべきではないかという意見が出された。いま函館にはまちづくりやコミュニティの住民活動にできるだけ規模の大きい支援が求められる時期にきているのではないか。それはいままで手をつけていない基金の信託財産そのものを、ある程度取り崩しても、積極的な助成活動を支援してこうということである。助成金額が増加することになれば、これまでの活動助成に加え、新たな分野の活動にも支援が可能になる。地球的問題である環境問題に関する活動等も必然的な課題

になってくると考えられるし、人間性を取り戻すような創造的なイベントも大切である。また単年度だけの活動でなく、継続的な事業への助成なども考えられる。

函館色彩まちづくり基金の運営はいままでの10年間は、収益活用+募金方式で行い、着実な基盤をつくりあげてきた。その成果を踏まえながらも、社会の諸条件の変化に対応して抜本的に運営方式を見直し、これからの10年間は取り崩し+募金方式の積極運営に転換し、よりダイナミックな活動支援を目指していくということになったのである。住友信託銀行の申請に基づき、北海道庁建設部まちづくり推進課の審査により、8月21日基金の取り崩しに伴う信託条項の一部変更について、その内容が認可された。変更した内容は、信託財産を毎年度200万円まで取り崩し可能とし、まちづくりや地区の活動等に規模の大きい、積極的な助成活動の支援を実現するということである。

2002年12月1日より、新運営委員にバトンタッチ

運営委員会の組織も10年目を機会に見直し、運営委員も新メンバーで新たな出発をすることになった。その選考

は現在の運営委員にこれまでの活動を踏まえ、さらに充実した活動を推進できる新たな委員を推薦していただき、事務局が取りまとめさせてもらった。

8月31日(土)の運営委員会のあと、現運営委員と、新運営委員の交流会が松陰町のスペイン料理店「バスク」で、なごやかな雰囲気の中行われた。

新運営委員をご紹介します

- ◎ 蕨沢憲吉 (函館工業高等専門学校教授)
- ◎ 角幸博 (北海道大学大学院工学研究科建築史教授)
- ◎ 佐々木貴子 (北海道教育大学函館校助教授)
- ◎ 腰山みゆき (カラーコーディネーター・オフィスNORD)
- ◎ 加納淳治 (編集室Kanou)
- ◎ 中尾繁 (北海道大学大学院水産学研究所教授)
- ◎ 小澤武 (建築家・小澤研究室)
- ◎ 二本柳慶一 (建築家・二本柳建築設計事務所)
- ◎ 小柏忠久 (函館市都市建設部部長)

新運営委員のプロフィールは次号「から21号」で紹介予定。2002年12月1日から新運営委員で出発いたしますので、よろしく願いいたします。12月からの活動募集に、今からアイデアを練って、ご期待ください。



平成13年度活動審査会報告

報告：からトラスト事務局 河内昌子

平成14年2月16日土曜日、函館市総合福祉センターにおいて、運営委員会が開かれ平成13年度活動審査会が行われた。今年度は応募件数が少なく3件の申請であったが、3件とも助成が決定した。

1、ペンキ塗りボランティア隊 / 櫻田和子

企画 2002・町家ペンキ塗りワークショップ
—市民との交流の展開—

助成金額：25万円

論評 平成6年から13年にかけて行われてきた町家ペンキ塗り活動は、その継続により、現在では函館市西部地区の夏の行事として定着し、市民から暖かいまなざしで受けいられている。また塗り替えの対象となる建物を公募することによって、所有者が塗ってもらおうといった受身の気持ちから、主体的に町なみの担い手になろうとする意識の高揚にも役立っている。塗り替えによる効果は多くの実績で明らかであり、街並みが改善されることが期待できる。

2、アート・ユニット・ロッパコ / 宮嶋宏美

企画 ロッパコの函館アートプロジェクト

助成金額：15万円

論評 昨年、元町の民家を拠点に行ったアートの実践では、普段何気なく接している日常の事柄に対し、視点を変えて見つめ直すことによって、環境が違った拡がりや深さ、面白さを発見できることを教えてくれた。参加した市民にとっても、新鮮な感情体験は柔軟な心をはくくみ、豊かな感性を育てる機会となった。これらは地域のまちづくりや環境を考えることにとっても大切なことであり、今年も更なる楽しい体験を期待したい。

3、北海道・東北史研究会 函館シンポジウム実行委員会 / 佐々木馨

企画 北海道・東北史研究会が企画する
函館市でのシンポジウム

助成金額：10万円

論評 学術的なシンポジウムであり、多数の参加者が函館に集う大きなイベントである。それだけに、関係ある別なところからの補助が出るのではないかと、という意見が出されたが、シンポジウムの貴重な内容をまとめるための資金の一部にしたいという希望が有意義であると認められ、助成が決定した。



から15号まで編集のお手伝いをさせていただいていたが、その後、東京に引っ越したために、すっかり函館のまちづくりから遠ざかっていた。それが今年6月末、住宅取材の仕事で、久しぶりに函館を訪れ、歴史的な町家の内部を見る機会に恵まれた。また、お住まいの方々から直接、話をうかがうこともできた。

このインタビューによって、私が改めて実感させられたのは、古い住宅に暮らす方々のご苦労だった。特に次世代に建物を残す苦労には、外部からは計り知れないものがある。

函館には伝統的建造物として市の指定を受けて、外観がきれいになっても、内装は古いまま手つかずという家も多い。そういう建物は暖房効率が非常に悪く、2階の床が傾いているところもある。

今回、お話を聞かせていただいたお宅では、建物に愛着を持ち、今後も頑張っで残していきたいと、笑顔でおっしゃっていた。しかし次世代の住人に伝えていくためには、もう少し住まい勝手のよさが求められるような気もする。

そのほか、通りに面した店部分を残し、奥の住まい部分を、現代生活に合うように改築された町家にも、取材にうかがった。そこにお住まいの方は、先祖から引き継いだ価値のある建物だけに、改築の際には柱や素材など、できるだけ多くの要素を残したという。しかしそのためには、重機で一気に壊して新築するよりも、はるかに多額の費用がかかってしまったという。

それでも改築や改装ができる家はいい。しかしそれが経済的に無理な場合は、住み手の我慢や心意気という、きわめて危ういバランスの上に、歴史的な建物がようやく存続している状況と言わざるを得ない。

歴史的な町並みが残る地域は、全国各地にある。こんな問題は、どこでも起きていることだろう。ほかの地域では、どんなふうに対処しているのだろうか。国内では特に対応策がないかもしれない。ならば海外ではどんな方法があるか、調べてみることはできないだろうか。

今後、公益信託函館色彩まちづくり基金は、元金の取り崩しを検討していると聞く。取り崩しにより、大掛かりなペンキ塗りプロジェクトを展開することは、今までにない町並み保存の効果が期待でき、取り崩しは前向きな決断である。

思えば基金立ち上げの際、下見板建築のペンキ塗り替えは大きな目的だったが、一方で助成金で若い人を海外に送り出すことも、目的のひとつだった。今まではそれだけの余裕がなかったかもしれないが、取り崩しが実現すれば、それも可能になる。

そうになったらアーバンデザイナーを目指す若い学生などに、海外の歴史的町並の実情を調べて来てもらってはどうか。古い住宅を住まいとして活かしていくために、どんな問題があり、どんな解決策があるのか。広い世界には、きっと函館の問題を解くヒントがあると思う。

たとえばアメリカには、NPO法人が歴史的な建物を買い入れて、修復し、転売するしくみがあると聞くが、具体的にはどんなふう不動産を動かすのか。それを函館で実現するには、どうしたらいいのか。そこまで思い切った具体策を、提示して欲しい気がする。さらに、それを基金の助成で実現させるところまで、頑張るためには、基金そのものを拡大する方法も、探らなければならない。

たとえ実現までたどり着かなかったとしても、そんな動きを起こすことが、将来への布石になるし、ほかの地域の歴史的町並保存にも、影響を与えることができるかもしれない。

また、これまで長く続けてきた西部地区のコーポラティブ住宅計画は、足踏みを強いられている状況のようだが、なかなか難しい問題が山積みで、頭が下

がる思いである。

ただ今回のインタビューで、ちょっと面白いことを聞いた。歴史的な町家は、もともと集住の場だったというのである。歴史的な建物は奥行きが深く、通りから見るよりも案外、大きな建物だったりする。昔はそんな家に、何世帯も同居していたという。親戚だったり、仕事仲間だったり、ただの知り合いだったりする家族が、ひと部屋ずつ間借りして住んでいた。

なるほど函館の町家には、集住の伝統があったのだ。ならばその伝統を、何とか生かす方法はないものだろうか。たとえば歴史的町家の内装に手を加えて、住まいとしての快適さを整えてから、シェアハウスやグループホームとして活用するとか。その改装費まで基金で助成するというのは、やり過ぎだろうか。それとも歴史的な町家や倉を核にして、周囲にコーポラティブ住宅を建てるなどのアイディアも考えられないか。

私たちは函館の歴史的な建物を、できるだけ多く次世代



に残してほしいと思う。ならば住まいとしての根本的な問題を、避けて通るわけにはいかない。行政が外観をきれいにしてくれたのなら、その次の段階として、建物内部の問題を、基金で取り組んで欲しいと思う。

なんだか外部から勝手なことばかり言うようだが、住民主体の町並み保存の先進例となってきた函館色彩まちづくり基金だけに、行政の手の届かない思い切った策に期待したい。基金取り崩しを機に、さらなる飛躍を！



空き地インフィル・小規模低層中密・住民ネットワーク型集合住宅供給による地区再生を

森下満 北海道大学助手

時が経つのは早いもので、我々が西部地区でベンキのこすり出しをおこなったのは1988年から89年にかけてである。それから13年後の現在、西部地区の環境は大きく変貌した。とくに最近目につくのは、空地と露天駐車場が増え、街区が歯抜け状態になったことである。

具体的なデータで示そう。表-1は、こすり出しをおこなった85件の建物について、その後の変化を昨年(2001年)11月に調べたものである。伝統的建造物と景観形成指定建築物の補修が合わせて22件で、全体の26%を占めている。景観条例等の町並み保全の行政施策が一定の役割を果たしていることがわかる。また我々ボランティアと建物所有者による自発的なベンキの塗り替えが各5件、6%と、町並み改善に対してささやかなる役割を担っているといえる。これらを合わせると32件、38%は西部地区の町並み、環境を改善する方向の動きとして位置づけられるものである。

これに対して逆に、町並みや環境を悪化させる方向の動きとして、木造下見板張りベンキ塗りの歴史的建物が取り壊され、その後には町並みに調和しない高層マンションや



新築住宅が建設されたり、下見板の防火サイディングへの張り替えなど町並みに調和しない建物改修が施されたりしたものが合わせて35件、41%にもほる。このうち空地と露天駐車場は合わせて13

件、15%である。この数字は、仮に50件の戸建住宅(一戸当たり200平方メートルの敷地面積として)が建てられる予定の1ヘクタールの街区を想定すると、7、8件の家が建てられていない状況に相当する。こういう状況がさらに進行すると、生活環境体としての西部地区が崩壊してしまうのではないかと、という危惧を抱かざるをえない。

伝統的建造物群保存地区などの従来の景観施策だけでは駄目なのは明白であり、街区単位の住環境整備が必要とされているのである。このことは25年も前から私の恩師である故足達富士夫先生が看破されていた。その具体的な戦

略として、現在増えつつある小規模の空き地を逆にとり、それを埋めるようなかたちで、(大規模集中ではなく)小規模分散、(中高層高密度でも低層低密度もなく)低層中密、(行政やマンション業者だけではなく)地区住民、新住民、まちづくり専門家、建築家、不動産業者、行政有志などのネットワークによる主体形成が統合された、「空き地インフィル・小規模低層中密・住民ネットワーク型集合住宅供給」による地区再生が描けないか、と思うのである。

■1988,1989年こすり出し調査対象建物85件のその後の変化 (2001年11月時点)

町並み変化の方向性	建物変化の状況	建物変化の具体的内容	建物件数	%
町並み悪化の方向	建物取り壊し	マンション建設	5	5.9
		建替新築	11	12.9
		駐車場	9	10.6
		空地	4	4.7
	建物改修	下見板の防火サイディング等への張り替え	6	7.1
	小計	35	41.2	
町並み改善の方向	建物改修	建物所有者によるベンキの塗り替え	5	5.9
		ボランティアによるベンキの塗り替え	5	5.9
		伝統的建造物の補修	14	16.5
		景観形成指定建築物の補修	8	9.4
	小計	32	37.6	
現状維持	変化なし	伝統的建造物	2	2.4
		景観形成指定建築物	1	1.2
		その他	12	14.1
	小計	15	17.6	
その他	西部地区外の建物		3	3.5
		総計	85	100.0



函館市西部地区の古い下見板張りの洋風町家を対象とした、私達のペンキ塗りボランティア活動は、1990年から始まり昨年の2001年までに計20件の建物のペンキを塗り替えてきた。とくに1995～2000年にかけて、「3軒効果町並改善」をキャッチフレーズに、町並みとしての改善が誰の目にもわかるよう、通りに連続する2～3件の町家のペンキを塗り替えてきた。2000年からは、ペンキを塗ってほしい建物を公募するなど、対象物件さがしから広く市民参加の仕掛けを考えるとという新しい試みをおこなってきており、それなりの応募がよせられている。また、熱心な市民からの塗り手参加者も見られ、とくに昨年は新たに地元の教育大学学生の参加が得られるなどこの活動を媒介とした市民との交流が展開しつつある。

2002年の今回は、これまでの活動を継承し、老朽化が進む町並みを元気づけるとともに、市民からペンキを塗ってほしい建物を募集し、塗り手である函館工業高校、函館高専、教育大学の学生、一般市民および札幌の北大の学生等のさらなる参加と、互いの交流を深めていきたいと考えている。すでに、京都の立命館大学と札幌の北海学園大学の学生の新たな参加表明があるし、公立はこたて未来大学からの参加も期待されることである。

今年は、8月31日(土)と9月1日(日)の2日間、2件の建物を塗ることに決まった。

1件は右図左下の加藤家住宅である。私達の現在の活動の基盤となったのは、いうまでもなく、1988、1989年の、西部地区の洋風下見板張り建物85件を対象としたペンキ「こすり出し」である。この時あたかもバブル末期で、「こすり出し」建物の一つであった加藤家住宅も、マンション業者の攻勢にあつて売却寸前のところであった。私達が「こすり出し」をし、建物の履歴についてヒアリングをしていた時に、居住者である一人暮らしの加藤さんが、できるなら亡きご主人との思い出深いこの建物で住み続けたいと希望していることを聞きつけた。何とかできないだろうか。そこで翌年の1990年、加藤さんを元気づけるために初めてペンキ塗りボランティア活動をおこなったのである。その結果、売却はとりやめとなり、加藤さんは自腹で屋根のペンキを塗り替えるなどのメンテナンスをし、現在も元気に住み続けている。私達の活動が、ささやかではあるけれども、町並みの保存や改善に対して「力」を持つことに目を開かせてくれた、原点ともいえるべき、記念すべき建物である。人間でいえばちょうどひとまわりした12年後の今年、再びペンキを塗り替えることには感慨無量のものがある。

もう1件は右図右上の高田木材店・他(右端の建物)である。この並びの写真左端の建物は、私達が1994年に初

めて函館からトラストから助成金を受けて、黄色とこげ茶色に塗り分けた洪田家住宅で、これも記念すべき建物である。その隣家は、函館市の景観形成指定建築物の岩崎家住宅店舗で、3年前に市からの補助を受けて緑色と黄色に復原された。これに高田木材店・他が加わると、この通りの表情が一変し、まさに「3軒効果町並改善」が期待できることである。

こういう古い下見板張りの建物が数件連続しているところは今ではまれで、伝統的建造物群保存地区を除いて西部地区にはほとんど見あたらなくなってしまった。「こすり出し」を行った85件の建物がこの10年余の間にどうなったのか、昨年調べてみた結果を、P5で報告しているのでご覧になっていただきたい。多くの木造下見板張り建物がなくなり、町並みが変化しつつある中で、函館市が予算をつけて手厚い保護が施されている伝統的建造物群保存地区内の伝統的建造物と伝建地区周辺の景観形成指定建築物とともに、私達ペンキ塗りボランティア隊によるこの活動は、ささやかではあるが、木造下見板張り建物の保存と町並み改善に対して、大きな役割を担いつつあるといえるのではないかと自負している。



ペンキ塗り替え対象町家②
高田木材店・他(右端の建物)のある町並み



ペンキ塗り替え対象町家① 加藤家住宅の正面外観





会場とした民家

昨年夏の3日間、函館は元町の民家を一件お借りして、リンク、ホテル、肩たたき……など、土地独特の特色をもつ家屋とその周辺地域を使ってささやかな展覧会を行ったアートユニットLOPPACO(ロップコ)。この展覧会がきっかけとなって、新たな活動も生まれました。「まち」というひとつの箱の中で、いかに「遊ぶ」かを考えて展開してきた活動の一部をご紹介します。

2001.8

ロップコ展/民家/北海道函館市元町

函館での展覧会の際に発行していたフリーペーパー「LOPPACO letter vol.2」が、遠く海を越えた福岡県北九州市で、同じく民家をアトスペースにして活動を行っているギャラリーのオーナーの目にとまり、企画展が実現しました。

現地に滞在することで生活感や文化の違いを体感しながら、「場所性」を意識した作品展開を目指し、実際にこの家で使用されている「ふすま」を使った展示を行いました。



レベル1外見

ふすまが展/成長型アトスペースlevel1/福岡県北九州市小倉

2002.2

2002.7-8

北海道帯広市で行われた、とかち国際現代アート展「デメーテル」の関連企画シティプロジェクトに参加しました。生活の中での「発見」を導くための装置をつくり、使ってもらうことで、「まちを使って」いく、新しい方向性を模索しました。

LOPPACO COASTER GARALLY

ありふれた日常的な風景を「ささやかな非日常」に変えることが当ギャラリーの目的です。

introduction LOPPACOとは?

「まち」というひとつの箱の中で
考え・遊び・つくるという考えのもと、
札幌を拠点に活動する若手アーティスト6人で
構成されたユニットです。
「発表活動する場所」と自分たちの関係性を知り、
場と環境を体感することを重要と考えて、
「つくること」をおこなっていきます。

ご意見・ご質問・ご感想など、お待ちいたしております。
お気軽にご連絡ください。

loppaco@hotmail.com

LOPPACO

小川 隆
川村 蓮水
武田 浩志
野上 祐之
久野 志乃
宮嶋 宏美



グラスの下の小さな空間、コースター。

LOPPACOは、そこをひとつの

「場所」ととらえて、

作品展示スペースとしました。

いつもは目にとめない場所を見るための

ひとつの装置。

ロップコースターは、

大量に生産され、消費されながら

「まち」に溢れるイメージとして

展開していきます。

コースターは全52種類、
日本国内外各地から、
50組の作家に出品していただきました。
すべてのコースターは、期間中、
NCアートギャラリー(帯広市大通り南8)にて
展示されました。



ロップコースターは、
シティプロジェクトの期間中1カ月間、
帯広市内の喫茶店やレストラン、
カフェなどの飲食店20店に設置され、
訪れた人達に使われることによって発見されて
帯広という「まち」の中に溢れ出しました。

2002.冬

今年も再び函館市で、場所と環境を使って行うアートの試みを
計画しています。同じまちをより深く考えて、感じることで展開
されるちょっと新しい展覧会にご期待ください。
今年は雪の函館を遊びにいきます。





公益信託函館色彩まちづくり基金・まちづくり活動助成公募

こうしたい、こうなったらいいな。そう思うだけでは何も始まらない。悩むより、まずは動いてみよう！そんなみなさんを、私たちが応援します。どんな夢でも応募してみてください。そこからきっと、あなたの「まちづくり」活動はもう始まっています。

公益信託函館色彩まちづくり基金では、今年も助成団体を募集します。基金スタートより函館の市民まちづくりを助成してきましたが、10年目を迎える今回、助成総額を約3倍に増大させさらに充実した函館の市民まちづくり活動を応援することになりました。意欲的なまちづくり活動を目指す団体にとっては、チャンス到来です。ふるってご応募ください。

■募集内容 函館のまちづくりに関わる、市民レベルの様々な活動や研究、企画。
応募資格は函館市民に限りません。

■応募期間 平成14年12月1日 ~ 15年1月31日

■審査方法 公益信託函館色彩まちづくり基金運営委員会による審査を行い、その結果をふまえて住友信託銀行が決定します。

■運営委員

- ◎ 荻沢憲吉 (函館工業高等専門学校教授)
- ◎ 角幸博 (北海道大学大学院工学研究科建築史教授)
- ◎ 佐々木貴子 (北海道教育大学函館校助教授)
- ◎ 腰山みゆき (カラーコーディネーター・オフィスNORD)
- ◎ 加納淳治 (編集室Kanou)
- ◎ 中尾繁 (北海道大学大学院水産学研究科教授)
- ◎ 小澤武 (建築家・小澤研究室)
- ◎ 二本柳慶一 (建築家・二本柳建築設計事務所)
- ◎ 小柏忠久 (函館市都市建設部部長)



■審査発表 応募者全員に通知。「から」21号紙上でも結果を発表します。

■助成金額 原則として1件当たり20万円～100万円まで。

■活動報告 助成を受けた活動は、平成15年8月の中間報告と、平成16年3月の最終報告ならびに会計報告をお願いします。

■基金委託者 (株)住友信託銀行札幌支店
〒060-0001 札幌市中央区北1条西3丁目3 TEL: 011-251-2171



■問い合わせ・応募用紙請求・応募宛先/函館からトラスト事務局
〒040-0001 函館市五稜郭町19-15 TEL: 0138-52-8411 日昇商事内
〒064-0915 札幌市中央区南15条西17丁目4-30 TEL: 011-513-0977 PRAHAまちづくりセンター内

■函館からトラスト事務局が都市景観賞を受賞！



第8回函館市都市景観賞に「函館からトラスト事務局」が、受賞することが決まった。函館からトラスト事務局は市民の景観形成活動部門の受賞で、建築部門では「トロイカ洋菓子店石川店」が受賞。10月1日に授賞式があり、会を代表して河内昌子氏が出席した。10年間の事務局活動を支えてくれた、みんなの頑張りが評価され、なにはともあれうれしいニュースです。事務局内部でかなり激しい議論とやりとりが交わされた時期もありましたが、過ぎてしまえばみんなニコニコ。これからも頑張っていく所存です。事務局の世代交代も課題ですが、もうすこし現スタッフで続けます。なお一層のご支援をよろしくお願いいたします。



から20号
kara.Dec.2002 No.20

■編集/柳田良造
河内昌子
■デザイン/LOPPACO